様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２３年４月２５日現在

機関番号：１４３０１
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：２００８～２０１０
課題番号：２０５２０２２６
研究課題名（和文）　シェイクスピア演劇における不安定な国民像に関する考察

研究課題名（英文）　Unstable Nationhood in Shakespeare’s Plays

研究代表者
廣田 篤彦（HIROTA ATSUHIKO）
京都大学・文学研究科・准教授
研究者番号：４０２９２７１８

研究成果の概要（和文）：
本研究においては、シェイクスピア演劇におけるイングランド人アイデンティティの不安定さを以下の三側面から分析した。
(1)国民アイデンティティに対する脅威としてのキルケ像とシェイクスピア演劇との関係。
(2) 初期近代のテクストに示される服装と国民アイデンティティの関係。
(3)『リア王』におけるブリテン国家像と 16－17 世紀のリア王に関する諸テクストとの比較。
この際、ヨーロッパ大陸の先進的な文化の影響、また、政治的文脈などを特に考慮した。

研究成果の概要（英文）：
This study analyzed the representations of instability of English identity from the following three aspects, with references to the influence of the advanced Continental cultures and to the political context.
(1) Shakespeare’s representations of Circe as threat to English national identity.
(2) Problems of sartorially represented English identity in early modern texts.
(3) The representation of Britain in *King Lear* in comparison with the Lear accounts in the sixteenth and seventeenth centuries.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００８年度	1,300,000	390,000	1,690,000
２００９年度	1,000,000	300,000	1,300,000
２０１０年度	1,100,000	330,000	1,430,000
総　計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：文学・英米・英語圏文学
キーワード：英文学・シェイクスピア・国民像

１．研究開始当初の背景

本研究は研究代表者が科学研究費補助金などにより継続して行ってきた初期近代イングランドにおける国家像、国民像の表象に関する研究の延長線上に位置付けられる。

1980 年代以降、特に新歴史主義批評の隆盛以降、エリザベス朝・ジェイムズ朝期の文学テクストとそれを取り巻くコンテクストとの相互交渉の探求が盛んになってきた。こうした批評傾向の中、宗教改革後のカトリック諸国との対立、アイルランド植民の試みとこれに対するアイルランド人の抵抗、新大陸への関心、ジェイムズ一世即位とイングランド・スコットランド統合計画といった文脈の中でイングランド国家像、国民像がどのように形成され、種々のテクストに表されてきた

かについては盛んに研究が行われている。
　研究代表者はこのような研究動向の中で、主として以下の二点に関して研究を進めていた。
　(1)イングランド歴史劇を対象に歴史的に形成されたイングランドという概念の持つ複雑さについて考察し、以下の論考を発表した。「知ってのとおり、私はウェールズ人だから」(日本シェイクスピア協会編『シェイクスピア―世紀を超えて』2002)、「イングランドの中のフランス―『ヘンリー六世・第一部』における英仏二項対立の破綻」(日本シェイクスピア協会会報 *Shakespeare News*, vol.45 No.3, 2006)。
　(2)シェイクスピアがローマを扱った劇作品に着目し、ローマが征服戦争により都市国家から後世のヨーロッパにおいてモデルとなる世界帝国へと変質していく中で、文明の中心としてのローマと、征服によりローマ帝国の版図の周縁に組み入れられていくことになる「蛮族」との境界がローマの圧倒的な政治的、文化的影響力の中で曖昧になっている様子を考察した。この成果については“Forms of Empires: Rome and Its Peripheries in *Cymbeline*”(*The Shakespearean International Yearbook,* vol.4, 2004), “The Partner of Empire: Literacy and Imperialism in *Titus Andronicus*”(*The Shakespearean International Yearbook,* vol.6, 2006)の二論文として発表していた。

２．研究の目的

　本研究は特にシェイクスピアの演劇テクストが初期近代におけるイングランド国家並びにイングランド国民という概念の不安定さをどのように表しているかを明らかにすることを目指すものである。

３．研究の方法

　年度毎に以下の方法で研究を遂行した。

平成 20 年度
主としてエリザベス朝期の歴史劇に焦点を当てて研究を進めた。
(1)作者不詳の歴史劇『ウッドストック』における政治的な対立が服装に表されていることから、様々なジャンルのテクストにおける服装と国民的アイデンティティについて考察した。
(2)キルケやサイレンといった古典古代文学の魔女たちが、16 世紀においてイングランド人のアイデンティティを脅かす外国の魅力を体現するものとして描かれていることに着目し、シェイクスピア演劇においてこれらのイメージがどのように使われているかを、特に『ヘンリー四世・第一部』に焦点を当てて考察した。
(3)歴史劇に描かれたイングランド人アイデンティティの不安定さとの関係に留意しながら『間違いの喜劇』についてキルケ・サイレンのイメージがどのように使われているか考察した。

平成 21 年度
前年度に始めた歴史劇と『間違いの喜劇』についての考察をさらに進めその一部について研究発表を行うと共に、『トロイラスとクレシダ』について研究を進めた。
(1) エリザベス朝歴史劇を中心に服装に観るイングランド人アイデンティティの不安定さについての考察を論文‘The Tardy-Apish Nation in the Homespun Kingdom: Sartorial Representations of Unstable English Identity’にまとめ、その一部をパリ第 3 大学、モンペリエ大学において発表した。
(2) 前年度に開始した『間違いの喜劇』と『ヘンリー4 世・第一部』に関して行った考察を論文にまとめた。前者についてはアメリカ・シェイクスピア学会第 37 回大会におけるセミナーにて発表した。
(3) 『トロイラスとクレシダ』ついて「庶子と混血」、「女性の越境」、「半神」に焦点を当て、この劇においてトロイ・ギリシアそれぞれのアイデンティティがこれらによって脅かされている点を指摘し、このことを初期近代イングランド人のアイデンティティとの関連において論じた論文‘Hybrids and Bastards: the Erosion of the Trojan and Greek Identities in *Troilus and Cressida*’を作成した。

平成 22 年度
前年度までの研究の成果の一部を出版すると共に、国内外の学会で発表した。さらに『アントニーとクレオパトラ』と『リア王』に関しての分析を進めた。
(1)前年度に口頭発表した２論文を国際的な批評を受けられる形で出版した。
(2)前年度までに研究を進めてきた、『ヘンリー四世・第一部』と『トロイラスとクレシダ』における、キルケ像とイングランド人アイデンティティの関係について研究発表を行った。
(3)上記のテーマについて、『アントニーとクレオパトラ』に関して研究を進め、‘Circes in Egypt’と題する論考にまとめた。この論考では、クレオパトラとキルケ・サイレンとの類似を指摘すると共に、クレオパトラとアントニーがそれぞれキルケと関連付けられる

イメージを通じてローマ人としてのアイデンティティの不安定さを示している点をジェイムズ朝のイングランド人アイデンティティの不安定さとの関係において分析した。現在この論考を前年度までの研究成果と共にモノグラフの形にまとめる準備を進めている。
(4)『リア王』について、その材源となったエリザベス朝の諸テクストならびにネイハム・テイトによる書き換えと比較しながら、この劇に表わされている 17 世紀のブリテン国家像を考察した。その成果を 2 つの論文にまとめ、国内外のシンポジウムにおいて発表した。

４．研究成果
(1) 「国民アイデンティティに対する脅威としてのキルケ像とシェイクスピア演劇との関係」
『オデュッセイア』に登場し、人（男）を豚の姿に変える魔力を持つキルケは、その後の文学的伝統の中で様々に解釈され、また、その眷属と考えられる女性登場人物を生み出してきた。この中には『アエネイス』のディドー、『狂えるオルランド』のアルチーナ、『解放されたイェルサレム』のアルミーダ、エドマンド・スペンサーの『妖精女王』に出て来るアクレイジア、などが含まれる。一方、初期近代イングランドではキルケは、やはり『オデュッセイア』に登場するサイレンや、ロードスのアポロニウスによる『アルゴー号航海記』でその姪とされているメデアと関連付けられて、魔女の代名詞となっていた。特に、ロジャー・アスカムの『家庭教師』やリチャード・スタニハーストによる『アイルランドの解説』（ホリンズヘッドの『年代記』所収）といったエリザベス朝期に書かれたテクストにおいては、キルケはイングランド人男性のアイデンティティに対する外国の脅威を体現するものとして記されている。
シェイクスピア演劇においても、様々な形で、キルケ、またはキルケを思い起こさせる登場人物が、特に男性登場人物たちの国民アイデンティティを脅かす存在として描かれている。本研究では『間違いの喜劇』、『ヘンリー四世・第一部』、『トロイラスとクレシダ』、『アントニーとクレオパトラ』に関して、キルケとの関連を考察した。
この考察は本研究の中核をなすものであり、その成果については国内外の学会で発表されると共に、一部については国際的に評価されうる形で出版されている。各テクストに関する研究成果の概要と関連する論文・研究発表は以下のとおりである。

①シェイクスピアの全演劇テクストの中で、キルケに対する直接の言及は二箇所あるが、その一つは『間違いの喜劇』に見られる。また、この劇にはキルケとサイレンの両方への言及があり、主たる材源であるプラウトゥスの『メナエクムス兄弟』と比較した際、キルケ的な魅惑と変容のイメージの頻度が高くなってもいる。
上記を出発点として、この劇におけるキルケのイメージと国民アイデンティティの問題との関係を、特に、1)放浪の主題と叙事詩の伝統、2)魔法が使われる町としてのエフェサスの伝統と変身のテーマ、という観点から分析すると、二組の双子たちによって引き起こされるアイデンティティの危機が、男性としての能力の危機という問題と絡み合いながら、エフェサスとシラクサという二都市国家への帰属の問題と密接に関係していることが明らかになる。さらに、ここで探究されている、出生地主義と血統主義という、帰属を決定する二要素はイングランド人としてのアイデンティティを決定するものとして『ヘンリー五世』でも扱われ、さらに後述③で扱った『トロイラスとクレシダ』においても焦点が当てられている。(雑誌論文①、学会発表⑦)。

②『ヘンリー四世・第一部』においては、イングランド人アイデンティティの不安定さが隣接するウェールズ(人)との関係で示されており、ここにもキルケのイメージが使われているが、この問題は以下の四点に整理できる。1)劇の冒頭で言及されるイングランド兵の亡骸を冒涜するウェールズ女性たちと、実際に劇に登場する唯一のウェールズ女性であるモーティマー夫人が、それぞれ去勢する力を有していると表わされ、キルケを思い起こさせる特質を示している点。2)ホットスパーが語るセヴァーン河畔におけるモーティマーとグレンダウアーの決闘に関して、この川の水を飲むという行為がモーティマーの「堕落・変質」の始まりであることから、キルケ的伝統との関連がうかがえる点。3)飲酒、堕落への誘惑など、フォールスタフもまたキルケを思い起こさせる特徴を示している点。特に、シュルーズベリーの戦いにおけるフォールスタフとハル王子との短い邂逅場面が、キルケに関する諸伝統との関連でモーティマーとグレンダウアーの決闘と比較しうる要素を示している点。4)キルケ―フォールスタフの誘惑に打ち勝ったハル王子が、一方では魔術と関連付けられることによって、また一方ではイングランド皇太子の称号であるウェールズ公(Prince of Wales)を名乗ることによって、上記のウェールズの魔女たちと関連付けられる点。
これら各点は、1)この劇のイングランド人男性アイデンティティが、国家の辺境に存在するキルケの眷属としてのウェールズ人による脅威にさらされていること、2)これと比

較しうるイングランド人アイデンティティの問題がイングランド国家の中心部にも見られ、それをハル王子が体現していること、の二つを示しており、『ヘンリー四世・第一部』においては、イングランド人アイデンティティが周縁のみならず中心においても不安定なものとなっている。(学会発表②)

③トロイ戦争を描いた『トロイラスとクレシダ』にもキルケを思わせる女性たちが登場したり、言及されたりする。これらの女性たちがトロイ人とギリシア人の区別の曖昧さにどのように寄与しているかを以下の三つの側面から検討し、さらにこれがエリザベス朝末期のイングランド人アイデンティティと比較しうることを雑種と庶子に焦点を当てながら考察した。

1)エイジャックスはこの劇において最も顕著に雑種性を示す登場人物である。彼はギリシア人テラモンとトロイの王女ヘサイアニーの息子であるが、彼が混血であることは、通常は問題となることが少ない母方の血筋に焦点を当てると共に、トロイ人・ギリシア人それぞれの定義の違いを明るみに出す役割も果たしている。2) サーサイティーズはギリシア方で庶子を代表し、マーガレトンは文学的伝統の中でほとんど言及されることのないプライアムの庶子たちを代表している。シェイクスピアは戦場におけるこの二人の遭遇の場面を挿入しているが、サーサイティーズによる庶子間の友愛の提唱は、庶出がトロイ・ギリシアの区別を無効にする可能性を示している。3) この劇ではトロイ人が血統によって、ギリシア人は地理的要件によって、定義されているが、これらは『ヘンリー五世』ではイングランドの貴族と郷士を定義するのにそれぞれ使われており、また、前述①で検討したように『間違いの喜劇』でも扱われている。

このように『トロイラスとクレシダ』において、雑種と庶子たちはトロイ・ギリシアという、トロイ戦争における根本的な二分法が絶対的なものでないことを示唆している。(学会発表④)

④上記①～③はいずれもシェイクスピアがエリザベス朝期に書いたと考えられている劇を取り上げてそれらにおける帰属やアイデンティティの問題をキルケの伝統との関係で考察したものであるが、これらと比較するため、ジェイムズ朝期に書かれた『アントニーとクレオパトラ』について、以下の各点から考察した。

1)クレオパトラはトロイのヘレンなどと並んで文学的伝統の中ではキルケの眷族とされてきた。この性格はシェイクスピアの劇の中でもアントニーを骨抜きにする女として表されている。同時代のクレオパトラを主人公とした劇作品とは異なり、『アントニーとクレオパトラ』においてクレオパトラが直接キルケと呼ばれることはないが、「魔女」と呼ばれるクレオパトラに魅了されたアントニーが鴨や魚と比較されることによって、クレオパトラとキルケとの関係が示されている。こうしたクレオパトラに魅了されたアントニーはローマ人としてのアイデンティティをも同時に失うものとして描かれている。2) クレオパトラはジュリアス・シーザーとの間に庶子シーザリオンをもうける。シーザリオンは『トロイラスとクレシダ』におけるエイジャックスと同様、混血であり、また、庶子でもある。シーザリオンはシェイクスピアの劇では言及されるのみであるが、ローマとエジプトの二項対立を曖昧にする役割を果たしている。3)クレオパトラ自身もエジプト女王としてローマと対立する東方を体現している一方、ジュノーやヴィーナスといったローマの女神たちとの比較を通じてローマとの関係を示している。特に、彼女がイシス神と比較されていることは、この女神がローマから東方に至る様々な女神をその顕現の諸相として有することから、クレオパトラはローマとエジプトの境界を曖昧にしていると考えられる。4)アントニーもクレオパトラとの関係が始まる前から、バッカスとの関係を通じて非ローマ的性格を示し、また、キルケとの関係をも示していた。以上より、この劇においてはアントニー、クレオパトラという主要登場人物が共に、キルケ的な性格を有し、ローマ人のアイデンティティの不安定さを示していると考えられる。

(2)「初期近代英国の諸テクストに示される服装と国民アイデンティティの関係」

初期近代イングランドにおいて服装は社会における位置を示すものとして機能することが期待されていたが、同様に様々なテクストにおいて「イングランド人らしさ」を表す服装が探求されていた。作者不明の歴史劇『ウッドストックのトマス』においてはトマスが身につけるホームスパンの厚手のウールと、彼の政敵であるリチャード二世がその取り巻きと共に考案する様々な国の衣服をつぎはぎしたものが、これら二人の登場人物のイングランド人らしさと非イングランド的性格をそれぞれ表す機能を果たしている。

しかしながら、エリザベス朝、ジェイムズ朝に書かれたテクストにおいてはこうした二分法は必ずしも明確ではないことが示されている。シェイクスピアを含むこの時代の作者たちは外国の衣服のつぎはぎを何度もイングランド人のお気に入りの服装として描いているため、こうした、極めて非イング

ランド的な服装の特徴が逆説的にイングランド人らしさを表すものとさえなっていた。一方、16 世紀においては厚手のウール生地はウェールズ人やアイルランド人に特徴的なものとして描かれることもあり、イングランド人らしさというよりむしろ、後進性や文化的洗練の欠如を表すものであった。このように、外国の衣服のつぎはぎも、厚手のウール生地も共にイングランド人らしさと非イングランド的な特質を表し得た。この「二重の二重性」とも言うべき現象はイングランド人アイデンティティの脆弱性と不安定さを示すものである。本側面からの考察はフランスにおいて口頭発表され、そこで得られた知見を基に国際的な評価を得られる形で出版されている。(雑誌論文②、学会発表⑤⑥)

(3)「『リア王』におけるブリテン国家像と 16－17 世紀のリア王に関する諸テクストとの比較」

シェイクスピアの『リア王(*King Lear*)』では、主人公であるリアが統治するブリテン王国の範囲と、その娘たちの結婚相手の爵位が共にそれ以前のリア王伝説やエリザベス朝に書かれた『レア王(*King Leir*)』から変化している。これらの変更に着目し、各々の変更点についてジェイムズ朝初期に大きな政治的問題となっていたイングランドとスコットランドの統合計画とその挫折に伴うイングランド人アイデンティティの不安定化の問題という文脈において検討を加えた。さらに、17 世紀後半の王政復古期に書かれたネイハム・テイトによる改作においても更なる変更がこれらの点に関してなされている点にも留意し、16 世紀から 17 世紀後半に至る長いスパンにおけるイングランド国家の枠組の変化との関係でこの問題を考察した。本側面からの研究についてはその成果が国内外で口頭発表され、国際的な共同研究の一部として論文を出版する計画が進行中である。

①17 世紀英文学に関しては、ジョン・ケリガンらにより、グレイト・ブリテン島とアイルランド島を含む「大西洋群島(the Atlantic Archipelago)」内の様々な民族や宗教的なグループの相互関係に着目した再検討・再評価の動きが進められている。この視点からテイトによる改作をシェイクスピアの『リア王』と比較すると、劇の終幕におけるオールバニー公の分割された王国に対する態度の変化やコーンウォール公の伝統的なライバルとしてのウェールズ公への言及などから理解されるブリテン国家の枠組みが、テイトの『リア王』が初演された 1681 年当時に大きな政治問題となっていたヨーク公ジェイムズ（後のジェイムズ二世）に対する王位排除問題と密接な関係を持ったものとなっていることが指摘できる。(学会発表③)

②シェイクスピアの『リア王』に見られるバランス政策は 15 世紀以来の勢力均衡思想の延長線上に位置づけられる。また、一方では、シェイクスピアによってリア王のプロットに導入されたこの均衡政策は、17 世紀中葉以降、特に三十年戦争の終結以降に現実の国際政治の主要な規範の一つとなった勢力均衡思想の発展と軌を一つにするようにテイトの改作においてはより明確な仮想敵国を対象に整理されたものとなっている。勢力均衡に基づく国際関係は、対抗宗教改革や絶対王政と並んで 17 世紀に隆盛となったバロックを支える下部構造の一部となっていることから、シェイクスピア劇のバランス概念とバロックとの関係が指摘できる。(学会発表①)

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　３件）

①Atsuhiko Hirota, ‘Circes in Ephesus: Civic Affiliations in *The Comedy of Errors* and Early Modern English Identity’, *The Shakespearean International Yearbook*, vol.10, 2010, pp.231-255 査読有

②Atsuhiko Hirota, ‘The Tardy-Apish Nation in a Homespun Kingdom: Sartorial Representations of Unstable English Identity’, *Cahiers Elisabethains,* vol.78, 2010, pp.1-12 査読有

③Tom Bishop and Atsuhiko Hirota, ‘Pacific Shakespeare: An Introduction’, *Shakespeare Studies* (The Shakespeare Society of Japan), vol.48, 2008, pp.1-5 査読有

〔学会発表〕（計　７件）

①Atsuhiko Hirota, ‘King Lear’s Balancing Policy: A Baroque Initiative’. Symposium: Speaking of Baroque Shakespeare
2011 年 2 月 21 日 東京大学総合文化研究科 (The University of Tokyo Center for Philosophy)　東京都目黒区

②廣田篤彦、「ウェールズの魔女たちとフォールスタフ」
第 49 回日本シェイクスピア学会
2010 年 10 月 16 日　福岡女学院大学　福岡市

③Atsuhiko Hirota, ‘Kingdoms of Tate’s Lear and Shakespeare’s Lear: A Restoration Reconfiguration of Archipelagic Kingdoms’.
Shakespearean Configuration: An International Symposium on Shakespearean Forms
2010年9月29日　モンペリエ大学　フランス

④Atsuhiko Hirota, ‘Hybrids and Bastards: the Erosion of the Trojan and Greek Identities in *Troilus and Cressida*’.
The 34th International Shakespeare Conference
セミナー Catalysts of Cultural Change
2010年8月9日　バーミンガム大学シェイクスピア研究所　連合王国

⑤Atsuhiko Hirota, ‘The Tardy-Apish Nation in the Homespun Kingdom: Sartorial Representations of Unstable English Identity’.
IRCL セミナー 2010年5月7日
モンペリエ大学　フランス

⑥Atsuhiko Hirota, ‘The Tardy-Apish Nation in the Homespun Kingdom: Sartorial Representations of Unstable English Identity’.
講演 2010年5月4日
パリ第三大学　フランス

⑦Atsuhiko Hirota, ‘Circes in Ephesus: Civic Affiliations in *The Comedy of Errors* and Early Modern English Identity’.
第37回 アメリカ・シェイクスピア学会
セミナーThe Return of the Early Comedies in Shakespearean Scholarship
2010年4月11日　Washington, DC　アメリカ合衆国

６．研究組織
(1)研究代表者
廣田 篤彦（HIROTA ATSUHIKO）
京都大学・文学研究科・准教授
研究者番号：４０２９２７１８